**「スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ**

**至福の権化」**

**2023年1月15日**

**生誕祝賀会　午後の講義**

**スワーミー・メーダサーナンダによる講話**

**於・逗子協会**

本日の講義のテーマは、「スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ、至福の権化」です。これからお見せする写真を見れば、スワーミージーが至福の権化であることが分かるでしょう。彼は喜びと活力に満ちています。西洋で滞在中のある日、スワーミージーが数名の信者と森で過ごしていたときのことです。彼は寝そべって信者たちとおしゃべりをしていました。ある信者が彼に近づいて、写真を撮らせてください、と頼みました。スワーミージーは、最初は断っていましたが信者たちが何度も頼むので、さりげなく立ち上がった時に撮られたのがこの写真です。何の準備もせず、ポーズも取らずに自然体で撮られたので、この写真はとてもナチュラルです。

ウパニシャドの中に、「ブラフマンを知る者はブラフマンになる」という言葉があります。

ब्रह्म वेद ब्रह्मैव भवति

Brahmaved brahmaiva bhavati

ブラフマヴィド　ブラフマイヴァ　バーヴァティ

これには非常に深い意味があります。ブラフマンの本性は、「絶対の存在、絶対の知識、絶対の至福」です。ではなぜ、「絶対の」なのでしょうか？　なぜなら、それとは別の種類の「相対的」な「存在、知識、喜び」があるからです。それらは、「相対的で、小さく、衰える」という性質があります。一方で、至高のブラフマン（サッチダーナンダ）は、「永遠、絶対、最高」です。「ブラフマンを知る者はブラフマンになる」というとき、実際は、ブラフマンンの本性、すなわち、絶対の存在、絶対の知識、絶対の至福と同化する、ということを意味します。

ところで、祭司や僧侶の一般的なイメージとはどのようなものでしょうか？　一般的に西洋で僧侶のイメージは、穏やか、静か、まじめ、厳粛、微笑みはするものの、大声では笑わない。話をしても軽い世間話はしない。これらが人々の僧侶に対する一般的なイメージです。ですので、西洋世界がスワーミー・ヴィヴェーカーナンダに出会ったとき、彼らはいささかショックを受けました。というのは、彼らは、喜びに満ち、心から大声で笑い、冗談を言い、可笑しいことが好きな僧侶を見たからです。ときどき彼らは「スワーミージー、あなたも真面目になる時があるのですか？」と尋ねたほどです。そうすると彼はまじめを装って「ああ、私だって、時には真面目になるよ。それがいつだか知っているかい？　お腹が痛い時だよ」と言いました。

ここで、スワーミージーがいかに楽しいことが好きだったかを、たくさんの例を使ってお話します。主イエスも「花婿と一緒にいるときは、楽しむべきだ」と言いましたね。シュリー・ラーマクリシュナの人生を見ても、彼がどれほど喜びを感じていたかが分かります！　シュリー・ラーマクリシュナが弟子たちをどれだけ笑わせたことか。これらの出来事はすべて『ラーマクリシュナの福音』に記録されています。それだから『ラーマクリシュナの福音』は読み飽きることが全くないのです。

シュリー・ラーマクリシュナについて、ホーリー・マザーは述べました。彼が肉体を去った後に、多くのシュリー・ラーマクリシュナに会ったことがない信者がやってくると、ホーリー・マザーはシュリー・ラーマクリシュナについて「私は、彼が喜んでいないのを見たことがありません。子供といようと、若い人、年配の人、女性、紳士といようと、誰といても嬉しそうでした。彼は喜びに満ちあふれていました。それが彼の性格の特徴の一つです」と言いました。

アスウィニ　クマール　ドゥッタは有名な教育者で社会改革者でした。彼は時々シュリー・ラーマクリシュナを訪ねました。彼はアチャラーナンダという僧侶について、シュリー・ラーマクリシュナと話をしたことがあります。アチャラーナンダは偉大な学者でした。ある日、シュリー・ラーマクリシュナはアスウィニに「私とアチャラーナンダのどちらが偉いだろうか？」と子供のように尋ねました。アスウィニ・ドゥッタは公正な人でした。彼は「アチャラーナンダは偉大な学者ですよ。あなたとは比較になりません。あなたは字もほとんど読めないのですから」と言いました。それを聞いたシュリー・ラーマクリシュナは、少ししょんぼりしました。しかしその後、アスウィニ・クマールは重要コメントをしました「でも、あなたは喜びにあふれています！」。シュリ・ラーマクリシャはこれを聞いてとてもお喜びになり、「そのとおり、私は喜びにあふれているよ！」と答えました。

大病を患った人のもとに、知人たちが尋ねたときのことを想像してください。どんな空気が流れると思いますか？　心配、悲嘆、悲しみ、という空気が流れるのが普通でしょう。しかし、シュリー・ラーマクリシュナの最後の数か月のことを考えてください。彼はコシポルのガーデンハウスで信者たちの世話を受けていました。重病でしたので、時々吐血もしました。それなのに、そこでの状況を思い出してください。それは驚くべき光景です！　苦しみや悲しみが蔓延することなどありませんでした。シュリー・ラーマクリシュナは喜びに満ちあふれており、他の人たちをも喜びで満たしたのです。彼の外側は病気でしたが、内側には途切れることなく安定した喜びがあふれていました。本当は、そのことが彼の周りの空気を変化させました。

しかし、この状況について間違ったイメージを持たないでください。いつも喜びにあふれている人は、浅はかな人だと思われがちです。しかし、シュリー・ラーマクリシュナの場合は違います。彼はある瞬間はサマーディ、神意識に没入し、次の瞬間には、普通のレベルに降りてきて喜びに満ちていました。つまり、彼の場合、これら二つの両極に触れていたのです。

スワーミージーの場合も同じです。西洋での滞在中、彼はたった一人で唯物論者や偏狭なキリスト教宣教師に立ち向かわなければなりませんでした。講義をするために遠路を旅することもたびたびでした。凍えるように寒いアメリカで、雪が降ることもありました。しかも、泊まる場所や食べ物があるかどうか、定かでないこともあったのです。しかし、そんな逆境にあっても、スワーミージーの内面は喜びに満ちていました。彼はそんな時でさえ信者への手紙に、「昨夜、私のハートは喜びに満ちあふれ、それを収めきれず、まったく眠ることができなかったのだよ」と書いたのです。想像してください。心配や不安で眠れない人はいますが、喜びがあふれて眠れない人がいるのですよ！

先ほど言ったように、スワーミージーは喜びに満ちていたし、冗談も言いました。特に講義の後の質疑応答の時の冗談は秀逸でした。彼が冗談を交えて聴衆の質問に反論した例は少なからずあります。覚えておくべきことは、当時、多くのキリスト教宣教師がキリスト教を布教するためにインドを訪れていたということです。宣教活動のために彼らにはお金が必要でした。そのお金は主にアメリカからの寄付金が頼りでした。彼らは寄付金を集めるために、とてもひどいインドのイメージを植え付けていました。ですので、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの講義の後、「スワーミー、インドでは子供は川に投げ捨てられワニに食われる、という子供の犠牲供養があると聞きました。それは本当でしょうか？」と尋ねられるほどです。するとスワーミージーは、「ああ、そのとおりです。私も赤ん坊のときにガンジス川に投げ入れたんですよ。でも丸々太っていたので、ワニも私を飲み込めませんでした。だから私はこうやって生き延びています」と返しました。また、別の人が同じような質問をしました「女児よりも男児を好むので、女の赤ん坊が生まれると、ガンジス川に放り込むって本当ですか？」。　スワーミージーの答えはこうです「本当です。だから、インドでは男性が子供を産むのです」。

別の例もあります。ある人が尋ねました。「スワーミー、僧侶（モンク）とサル（モンキー）の違いは何ですか？」　「そんなに違わないさ。ソット（Sot）とスコット（Scot）の違いくらいだよ」。ソットとは大酒飲みで、スコットとはスコットランド出身の人のことです。スワーミージーはその質問者が、スコットランド出身でしかも大酒飲みであることを知っていました。

スワーミージーはよく自炊をする必要があったので、小さな台所を持っていました。彼はインドの信者や友人に、スパイシーな料理ができるようにスパイスを送るように頼んでいたので、スパイスを入れる小さな瓶をたくさん持っていました。ある年配の紳士がたびたびキッチンに入ってきては、スワーミージーに瓶の中身について尋ねたり、時には瓶からスパイスを出して味見をしたりしました。スワーミージーは少しイライラしましたが、礼儀上、何も言うことができませんでした。さて、赤唐辛子が入っている瓶がありました。ある日、その紳士が赤唐辛子の入った瓶を指さして、「スワーミー、この中には何が入っていますか？」と尋ねました。スワーミージーは「インドのプラムだよ」と言って、すぐに台所から出ました。これを聞いた年配の紳士は、その瓶からいくつかの赤唐辛子を取り出して食べ始めました。するとすぐに、胃が焼けるように感じました。それからというもの、その年配の紳士はスワーミージーの台所に入ることはありませんでした。

スワーミージーの講義に出席していた別の紳士の話です（彼はハゲ頭でした）。スワーミージーの講義で、特にヴェーダーンタの講義では、ブラフマンの概念について何度も言及されました。その紳士は講義の後、ハゲ頭に手をこすりつけて、しばしばこう言いました、「スワーミージー、結論はこれですね、私たちは皆ブラフマンです」。ですから、その人が来るたびに、スワーミージーは「ブラフマンさんが来ました」と言いました。

スワーミージーが西洋から戻ったあと、彼は兄弟弟子たちとともにベルル・マトに滞在していました。彼は、兄弟僧侶たちも講義ができるように、彼らを訓練すべきだと感じました。そこで、順番にベルル・マトの僧侶たちが講義を行うように手配されました。ある時、スワーミージーはコカ・マハーラージ(スワーミー・スボーダーナンダ)に講義をするように頼みました。スボーダーナンダジーは恥ずかしがりやで聴衆の前で話をしたことがなかったので、とても嫌がりました。しかし、スワーミージーは耳を貸しませんでした。そこで、しぶしぶスボーダーナンダジーが立ち上がって話そうとしたとき、突然強い地震が始まり、激しく揺れました。もちろん、誰もが安全のために逃げ出しました。状況はだんだんと元に戻りましたが、スボーダーナンダジーの講義が行われることはなく、彼はとてもホッとしました。その後、スワーミージーはこの出来事をからかって、「コカは大地を揺るがすようなスピーチをした！」と言っていました。

ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュは偉大なシュリー・ラーマクリシュナの在家信者で、劇作家、俳優、詩人でもありました。彼は多彩な人だったのです。彼は無軌道な生活を送っていましたが、最終的にはシュリー・ラーマクリシュナの信者になりました。彼は、「シュリー・ラーマクリシュナは神の化身である」と強く信じていました。無限なるブラフマン、神がシュリー・ラーマクリシュナとして化身なさったと信じて疑わなかったのです。これは『スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの生涯』の中にある話です。信者たちが、シュリー・ラーマクリシュナは神の化身である、と信じ始めても、初めスワーミージーはそのことを信じようとしませんでした。しかし後になって彼も信じるようになりました。ある時、スワーミージーはギリシュ・チャンドラ・ゴーシュを少しからかって、さらにはギリシュのシュリー・ラーマクリシュナへの信仰がどれほど深いものであるかを人々に示したいと思いました。スワーミージーはギリシュ・チャンドラのことをG.C.（Girish Chandraの略称）と呼んでいました。そしてある日、彼は信者たちの会合でギリシュに向かって議論を吹っ掛けました「ねえGC、シュリー・ラーマクリシュナが神の化身だなんてありえないよ。神は無限だろう？　どうすれば無限なものが有限な人間の体としてあらわれることなどできるというのだ？　そんなの不可能だよ」。　しかしギリシュ・ゴーシュは、それは可能であること、シュリー・ラーマクリシュナは神の化身以外の何者でもない、ということに100パーセントの確信がありました。そこで二人は激論を交わしました。どちらも鋭い知性の持ち主で討論の達人でしたので、議論はだんだんと白熱していきました。スワーミージーは穏やかで静かで落ち着いていましたが、ギリシュはだんだんと感情的になり興奮しました。スワーミージーは、わざとギリシュをもっと興奮させました。

とうとうギリシュ・チャンドラは自分を抑えられなくなり、テーブルを握りこぶしで叩いて言いました、「本当に君ってやつは。それは可能なのだ、私は見たのだから」。それを聞いたスワーミージーはすぐにギリシュ・チャンドラをぎゅっと抱きしめました。そしてその場に集まっていた人々に「わかったかい、ギリシュの信仰がどれほど深いものか」と言いました。本当は、スワーミージーはギリシュの信仰を試したかったので議論を始めたに過ぎなかったのです。

皆さんにシェアしたい最後の話をします。西洋である時、スワーミージーは彼の弟子や信奉者と旅をしていました。彼らは列車（汽船）に乗らなければなりませんでしたが、少し遅れていました。スワーミージー以外のみんなは早く着こうと急ぎましたが、スワーミージーだけは全く急ぐ素振りを見せませんでした。彼は自分のペースで歩いて移動しました。一人の信者が不平を言いました「スワーミージー、もっと急いでくださらないと、列車に乗り遅れますよ」。　するとスワーミージーは穏やかに言いました「列車（汽船）に乗り遅れても、次のに乗ればいい」。スワーミージーのその態度のせいで、彼らは本当に何度か列車や汽船に乗り遅れるという経験をしました。そこで少しうんざりした信者がある時言いました「あなたたちインド人には時間という感覚がない」。するとスワーミージーは「そのとおりだ。私たちは永遠のうちに生きているのだもの。君たちはいつも時間に束縛され、条件づけられている。それに比べて私たちは永遠のうちに生きているのだよ」と言い返しました。

スワーミージーの深い答えを考えてください。実際、スワーミージーの答えは不誠実なものでも思い付きの言葉でもありません。悟った魂は、本当に時間と空間を超越しているのです。彼はそれらに束縛されません。人が時間と空間を超越したとき、その人は永遠のうちに生きます。インドでは、永遠のうちに生きる、というコンセプトがあります。

今日の講義の目的は、私たちが時として遭遇する悲惨な状況、問題、トラブルの中でさえ、どうすれば喜びを得ることができるかを自問することです。

シュリー・ラーマクリシュナは、喜びには、ヴィシャヤーナンダとバジャナーナンダ、ブラフマーナンダの三種類があると言いました。ヴィシャヤーナンダは欲望を満足させて得られる喜び、バジャナーナンダは神の瞑想から得られる喜び、ブラフマーナンダとは神を悟った喜びです。ほとんどの人には、ヴィシャヤーナンダの経験しかありません。それは世俗的喜び、物質的喜びであり、有限で、さまざまな種類の反動に満ちており、ほとんどの場合、この種類の喜びは最終的には苦しみになります。しかし、それよりも良いのはバジャナーナンダです。その喜びは、例えば神の御名を歌う、瞑想、主について熟考する、などの霊的実践から得られるものです。しかし最高の喜びはブラフマーナンダです。その喜びはブラフマン、最高の至福を悟ったあとにだけ経験できるものです。バガヴァッド・ギーターはそのことについて言います：

*バーッヒャ・スパルシェーシュ　アサクタートマー　ヴィンダティ　アートマニ　ヤット　スカム/*

*サ　ブラフマ・ヨーガ・ユクタートマー　スカン　アクシャヤン　アシュヌテー//　5.21*

*外界の感覚的快楽に心惹かれることなく、常に内なる真我（アートマー）の楽しみに浸っている人は、常に至高者（ブラフマン）に心を集中し、限りなき幸福を永遠に味わっている。*

これが私たちの人生の最高のゴールです。